

『物語 オランダの歴史』

桜田美津夫

(中公新書 2017年) 322ページ

220781062 山本美桜

目次

- 目的
- 第1章 反スペインと低地諸州の結集
- 第2章 共和国の黄金時代
- 第3章 英仏との戦争、国制の変転
- 第4章 オランダ人の海外進出と日本
- 第5章 ナポレオン失脚後の王国成立
- 第6章 母と娘、二つの世界大戦
- 第7章 オランダ再生へ
- 結論



目的

- 17世紀初め・大航海時代から寛容国家の現代まで
- オランダ内外からの影響
- オランダが日本に与えた影響

- 小国ながら世界の注目を集めている今のオランダがどのように形作られてきたかがわかる一冊

第1章 反スペインと低地諸州の結集

- フェリーペ2世の即位とオランジェ公
- カール5世は低地諸州の統治権とスペイン王位をフェリーペ2世に
- 神聖ローマ皇帝位は弟のフェルディナントに託した
- **低地諸州**（＝ネーデルランデン）はスペイン帝国領地となった



第1章 反スペインと低地諸州の結集

- オランジェ公（ウィレム1世）の暗殺
 - 近侍の中にカルヴァン派を装い潜んでいた狂信的なカトリックに銃殺される
 - その後フェリーペ2世もフランスへの進軍中に過労と戦傷により死亡
 - フランスとも対立したことからオランダへの警戒が手薄に
 - ⇒ 独立を勝ち取った



第2章 共和国の黄金時代

- 他国と違って絶対王政には向かわずに**議会主権国家**に ⇒ 自由な経済活動が可能に
- 他に例を見ない『**黄金時代**』が始まった
 - 17世紀の終わりまで続いた最も平和な時代
 - 泥炭の採掘や風車の増設・多様化、運河での運搬などによる安価のエネルギー源

第2章 共和国の黄金時代

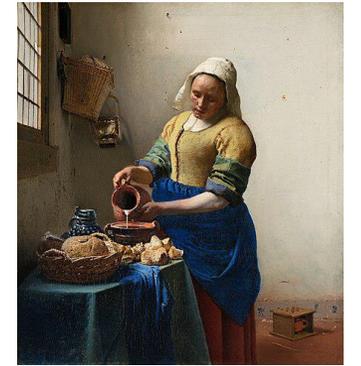
黄金時代の絵画

写実的な絵画

宗教を扱った絵画が少なく、風景画や静物画が多い

レモンストラント派...『寛容さ』を尊ぶ気風

⇒ ユダヤ人が集まることに



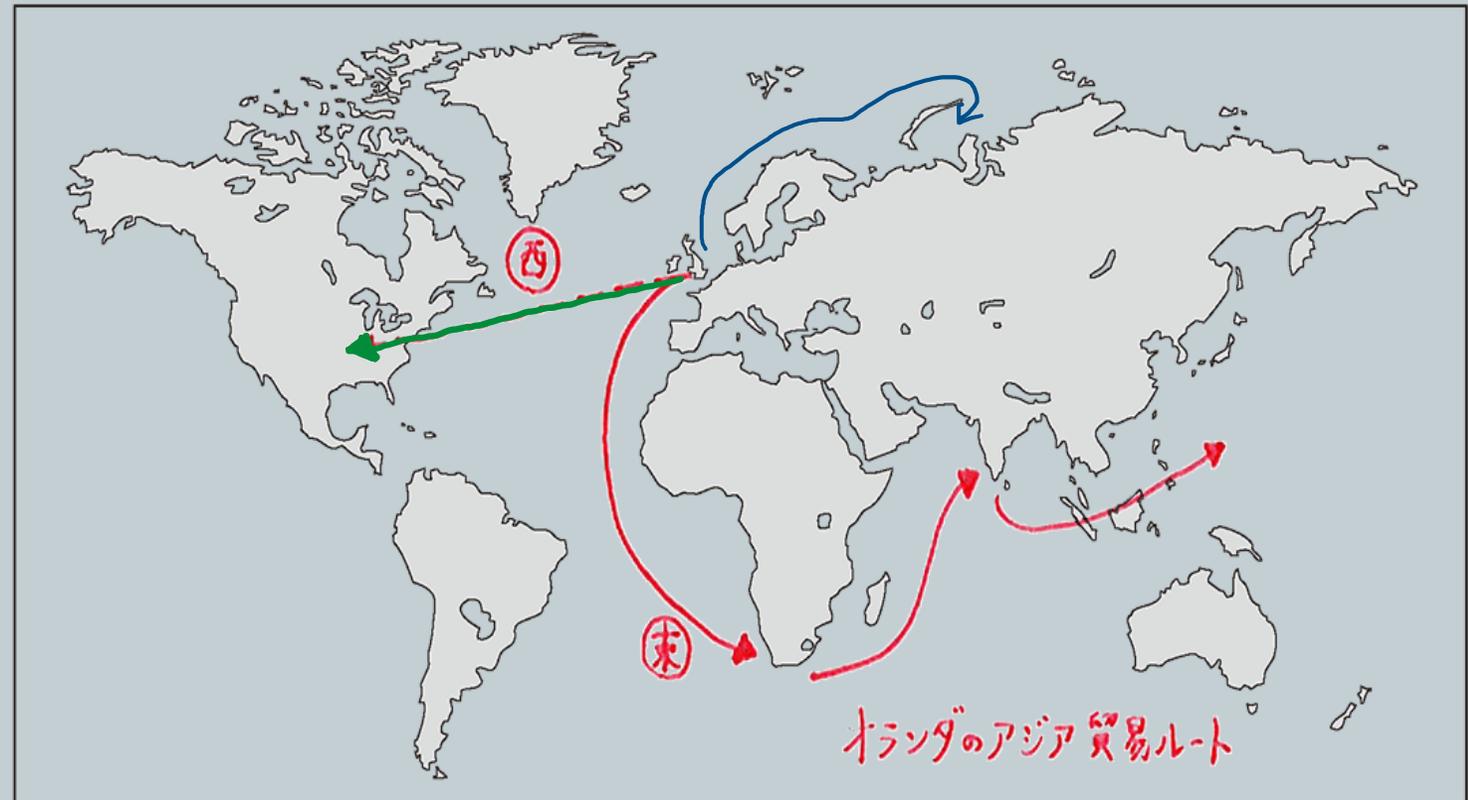
第3章 英仏との戦争、国制の変転

- 第1次～第3次の**英蘭戦争**
 - 第1次は痛み分け、第2次は勝利、第3次は敗北
 - 長期にわたる大規模な海戦
 - ⇒ オランダの海上優位は**イギリス**へ
- アメリカ独立戦争の支援やイギリスとの対立、オランダ王国へとなるなど移り変わりが激しい



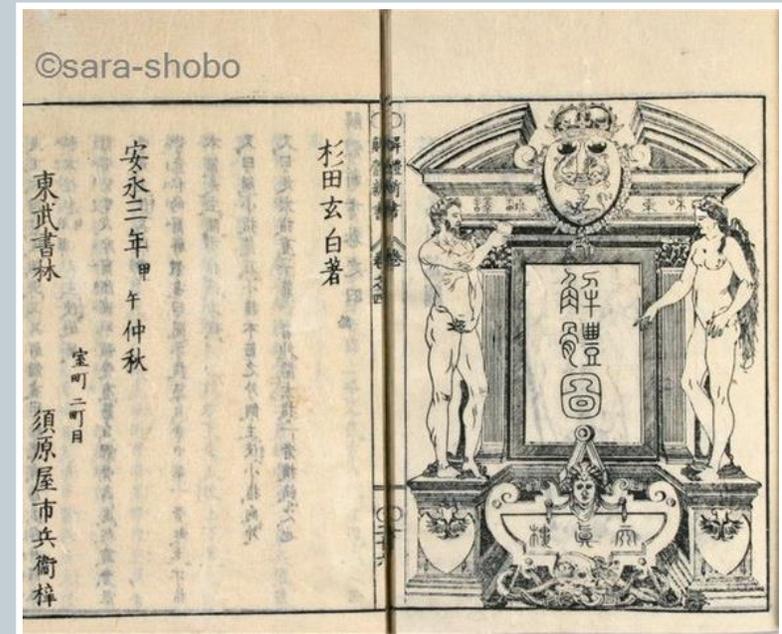
第4章 オランダ人の海外進出と日本

- 大航海時代の始まり
 - 北東ルート ●
 - 南西ルート ●
 - 南東ルート ●
- オランダの航路はかなり**冒険的**
⇒ 国土に対して多くの植民地を獲得



第4章 オランダ人の海外進出と日本

- 蘭学の繁栄
 - 医術と砲術を教示
 - 解体新書
- オランダ語は比較的親しみやすい言語だった



第5章 ナポレオン失脚後の王国成立

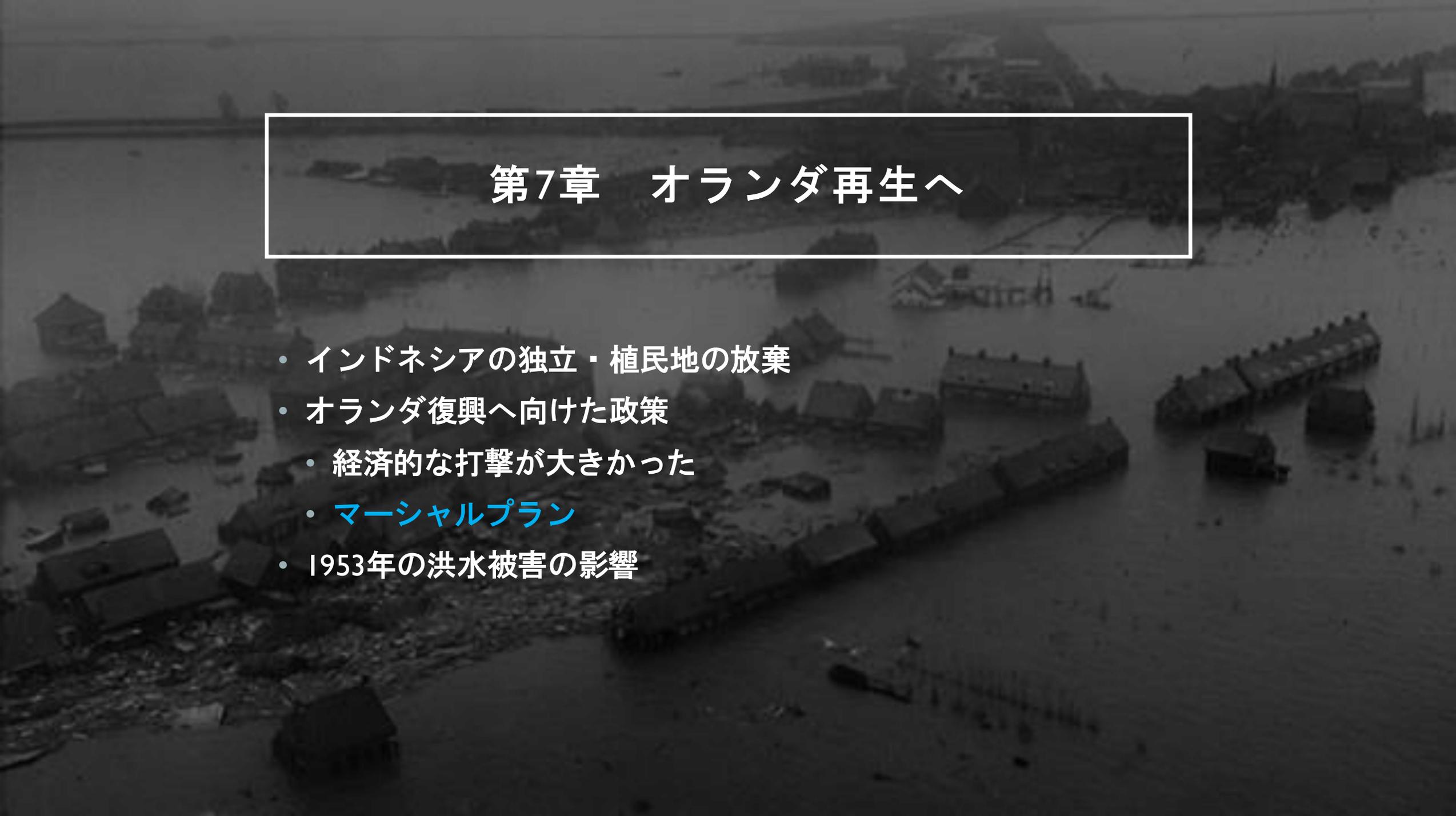
- ネーデルランデン連合王国の成立
 - 南部（ベルギー）と北部（オランダ）と東インド植民地から形成
 - ⇒ フランスに対する重石に
 - 初代国王**ウィレム1世**（商人国王）
- ベルギーの独立
- ウィレム2世の豹変



第6章 母と娘、二つの世界大戦

- 第一次世界大戦
 - 中立国となったが、ドイツが国境を脅かすと対抗
⇒ 国家としての団結力が生まれる
 - 柱状社会化...カルヴァン派、カトリック、社会民主主義、自由主義
- 第二次世界大戦
 - 1940年にドイツに占領、ユダヤ人狩りが行われる
 - 酷寒と食糧難により約2万人のオランダ人が亡くなる





第7章 オランダ再生へ

- インドネシアの独立・植民地の放棄
- オランダ復興へ向けた政策
 - 経済的な打撃が大きかった
 - マーシャルプラン
- 1953年の洪水被害の影響

結論

- ずる賢く臨機応変にトラブルを解決してきた印象
- 国土が狭い故、海外進出が不可欠であった
 - ⇒結果として大胆な政策が多くなった

